

アートプロジェクトにおけるボランティアの参画に関する研究

藤原, 旅人

<https://hdl.handle.net/2324/4784622>

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (芸術工学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 藤原 旅人

論 文 名 : アートプロジェクトにおけるボランティアの参画に関する研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、2000年代以降、全国各地に勃興してきた芸術祭やアートプロジェクトに着目、開催主体となった地域社会における地域活性化や地域再生といった公共政策からの期待や要請に答えると同時に、脱美術館化やサイトスペシフィック性を発揮した作品制作を遂げるアーティスト活動があいまって事業総体を複雑化・大規模化させてきた現場を支えたボランティア/サポーターの動きに注目、動員的かつ無償参加の初動段階から始まり、多様な参加動機と幅広い参加形態への広がりを見せながら積極的な参画段階へ至るボランティア/サポーターの成立と展開の経緯を明らかにしながら、芸術祭やアートプロジェクトを支えていく立場から、より豊かな市民社会を担う人材へ発展的に成長していく可能性へ至るまでの意義と課題を検証したものである。

まず、第1章では、日本社会におけるボランティア概念を4つの時代区分に分け概観した。特に、転換期に着目し1995年に起きた阪神・淡路大震災の災害発生時におけるボランティア活動の勃興から、それまでの組織として活動を行っていたボランティア活動から、個人で参加するボランティア活動へと転換した足跡を整理した。

続く第2章では、事業主体側から見た場合、芸術祭やアートプロジェクトの事業が成立する背景や展開にとってボランティアやサポーターは欠かせない反面、公募採用上の仕組みや制度面、管理運営上のマネジメント面、ボランティアの組織化、人的労務管理、安全管理や生活保障、等の課題があることを明らかにした。その上で、2000年来見られた動員型のボランティア運営を越え、アーティストの川俣正がディレクターをつとめた横浜トリエンナーレ2005では、サポーターという呼称を採用し、積極的な市民の参画を展開したことが、日本全体のアートプロジェクト事業の企画・運営へ大きな影響をもたらしていったことを明らかにした。

第3章では、参与観察調査を通し獲得された体験知に基づき、国内を代表する芸術祭やアートプロジェクトのボランティア運営に関する実態の分析と評価を通し事例検証を進めた。芸術祭やアートプロジェクトの現場は慢性的な活動の担い手不足を理由に厳しい参加条件やしぼりといったハードルをほとんど設けず、ボランティアはいたって参加しやすい。各地から集った参加者には上下関係がなく、結びつきが容易に形成される点を特徴づけたうえで、セルフエスティーム(自己肯定や自己承認)を獲得しやすい点を明らかにした。

第4章では、筆者が、さいたまトリエンナーレ2016開催時、総合ディレクターの芹沢高志から招聘され専門的なサポーター・コーディネーターとして加わり、参与観察調査を通して考察を行なった結果、当初の用意された枠組みへの参加段階から始まり、現場の運営や困難な問題を克服する過程で得られた内的成長を遂げながら主体的・積極的・自律的な参画段階へと成長していった過程を明らかにすることができた。

一方で、サポーター参加者の中には、旧来の主体-客体、積極-消極、中心-周縁、主人公-傍観者、という二元論的な観点からでは評価しえない曖昧かつ重層的な参加の実態があることが判明、主動と受動の間を成す中動的参加が現場を育む上で重要な効果を生んでいたことを明らかにした。

第5章では、さいたまトリエンナーレ2016終了後に、筆者が、実施したサポーター参加者へのヒヤリングやアンケート調査から、サポーターは現場の活動の実践や課題を克服する中、数々の体験知を培っており、そ

こから主体性を獲得していった過程を導き、どのような変化を生じたのかを捉えることができた。特に 44 名を対象のアンケート調査では、さいたま地域への意識が高まったこと、さいたま市政や文化政策のあり方に深く興味関心を持つようになったことが挙げられ、みずからの実践や活動を発揮することで得られた自発性や主体性を示すものであったこと、等がわかった。

第6章では、さいたまトリエンナーレ 2016 サポーターの市民参加者3名に着目し、事業参加前から事業参加後へ至る変容過程を質的調査を通して考察した結果、さいたまトリエンナーレ 2016 への参加が、さいたま市の旧来のイメージを相対化させ、さらに幅広いまちづくりのプログラムへ参加を希望する動機づけや意欲を育むことができたことが明らかになった。さらに、こうした芸術祭やアートプロジェクト現場の持続的な運営は、市民サポーターは芸術祭やアートプロジェクトで獲得した体験知を日頃の市民社会へ還元していくことが肝要であり、「アソシエーション」というような結びつき組織形成が優れた契機となりうることを論じた。

以上を受けた結論では、参与観察に基づく体験知と合わせ、わが国に独特の芸術祭やアートプロジェクトが事業を遂行する過程で、ボランティア/サポーターが示す参加から参画への段階的関与や成長過程の意義と課題を実証的に考察し、そこからボランティア/サポーター参加者が、発展的にまちづくりを担う市民へ成長していく可能性にも言及した。